

性 - 種 - 資本 - 軍事主義の共謀と動物の場所

クィア的観点から奪還可能な未来を問う

シム アジョン

エピローグや脚注からはみ出る動物の話

植民地、収容所、革命、フェミニズム、ディアスポラ、「慰安婦」、反軍事主義、難民、脱施設、ベトナム戦争。これらは過去2年のあいだに参加した学術大会やシンポジウムの主要なテーマである。このような公論の場に発表者あるいは討論者として参加するたびに、動物の話はエピローグや脚注に限定することで、なんとかやっと語ることができた。そしてそのような場で決まってしまう、「なぜこのような場で動物のことまで？」だとか「何か関係があるとでも？」だとか「付け足して言及する程度ならいいだろう」というような反応に遭遇する。一方、動物権の研究や活動をとともにしてきた仲間たち⁽¹⁾は、このような学術大会が未だに「人間中心主義」から抜け出せずいると学術的公論の場の限界を指摘する。そうした二つの反応の間で疑問が生じた。ならば、動物に関連したテーマを、独立したセッションとして確保すれば問題は解決されるだろうか？

同様の「欠落」の問題をクィア言説の場でも目撃する。「クィア理論は依然として白人のゲイを中心に構成されてきたのでは

ないか？黒人も、トランスジェンダーのクィアも、身体障害者も扱うべきだ」という主張をしばしば耳にする。しかし、このような態度はクィア理論が質問を構築する方法とはかけ離れている」とルインは強調する。その代わり、「クィア理論が持つ人種主義、非障害中心主義、同性愛中心主義などが、どのように動作しているのか、どのようなやり方で新しい規範性を生み出しているのか、クィア理論が構築される質問があるものは問題として提起しながらもなぜ一部のことは言わないままではいるのかを問わなければならない」と指摘する。「欠落」そのものが問題というよりは、それによって豊かな議論を導きだすことができずに、社会通念を繰り返すようになるということの問題視しているのだ。多くの研究者が自分の論文には、あれやこれやのことが抜けている、それが「本論文の限界」などと言ったりする。これは議論の足りなさを認知する謙遜であるかもしれないが、「扱っていないことを（自分も）知っている」という、欠落したテーマや存在に対する傲慢さかもしれない⁽²⁾。

この文章では「Leave no one behind」、つまり誰も置き去りにしないという、不可能な試みを態度として堅持しながら、「ど

のように特定の生命や身体に加えられる暴力が極めて正常な行為として位置づけられ、その結果、暴力が全く暴力として思われなくなるのか」という問いの前に、まず立ち止まることにしたい。法・制度的装置、レトリック、イデオロギー、種・性差別、そして資本主義と軍事主義が絡み合って、動物という存在を不平等な思考の枠と現実的な拘禁という檻に閉じ込め、持続的にこれらの思考と現実を再生産しているということを、具体的な事例を通じて明らかにしたい。動物の「場所」をさらけ出すことは、「私たち」の立ち位置も同時にさらけ出されることである。このような点で、ここでは「暴露」にとどまることなく、動物との関係の中で「知る」、「見る」のように日常的な動詞の意味を積極的に問い直し、動物の「そば」で動物と「共に」異なる未来を語る／つくることが何なのか一緒に悩んでみたい。

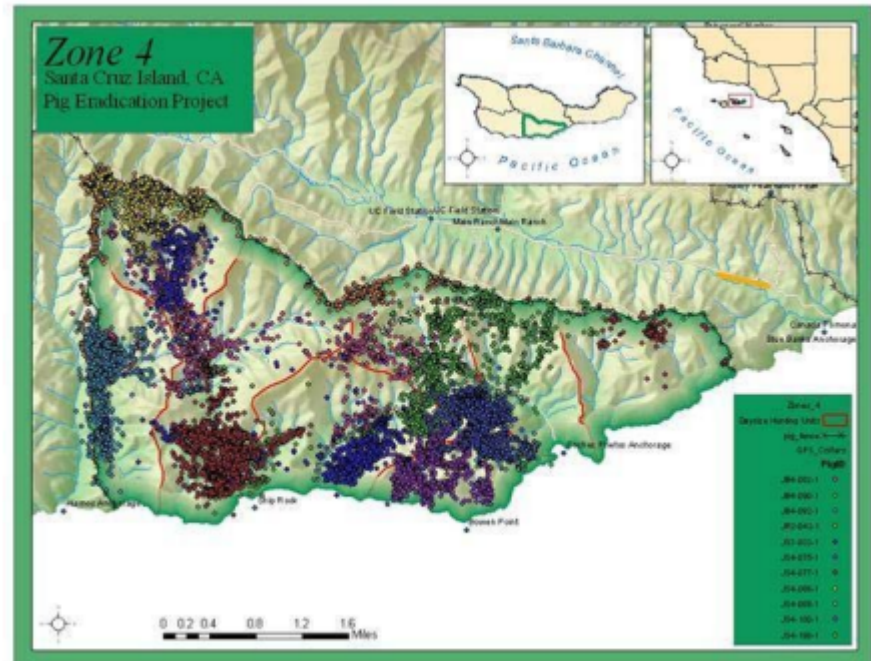
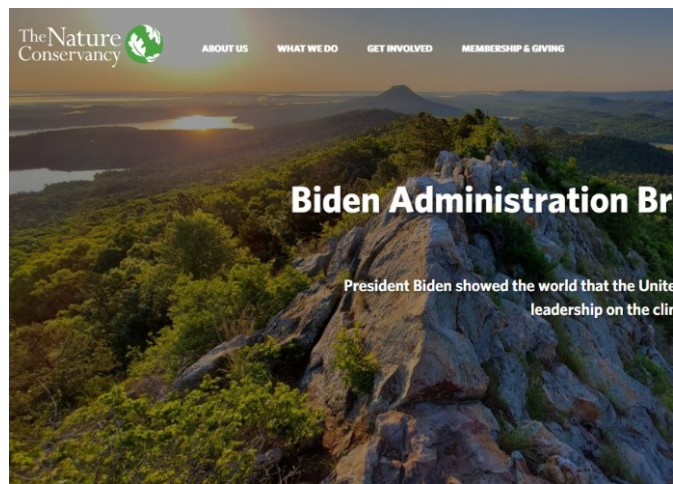
救済のための駆除 - 民間軍事企業 (PMC) ⁽³⁾ の動物撲滅プロジェクト

カリフォルニア州サンタクルス (Santa Cruz) 島には約 1,000 種の動植物が生息している。島の大部分は、環境保護団体である The Nature Conservancy (以下、TNC) ⁽⁴⁾ が所有している。TNC によると、1978 年の買い取り当時、そこは「危機に瀕した」島だった。「家畜の子孫」である野生化した羊と野生化した豚の過剰繁殖により、シマハイイロギツネを含む 10 種類余りの動植物が絶滅の危機に瀕しており、自然景観もひどく損なわれていたからである。

TNC のホームページには、この島の在来種のイヌワシが約 50 年前に殺虫剤による汚染に姿を消すと、本土から移住してきた、新たな捕食者ハクトウワシが子豚とシマハイイロギツネを捕食したため、10 年でシマハイイロギツネの 95% が絶滅したが、「科学に基づいた」努力の末、数百年前の島の姿をそのまま「復元」したという説明が書いてある ⁽⁶⁾。ギツネの個体数「復元」のために豚を島から除去 ⁽⁷⁾ し、ハクトウワシを捕獲して本土に移住させるというプログラムは、最も成功した絶滅危惧種の回復プログラムとして知られている。以下は、TNC のホームページに紹介された関連内容だ。

約 150 余年ぶりにこの島には、土種地元ではない動物がおらず、土着種だけが繁栄している。野生化羊は、1980 年代にすべて取り除かされた。18 ヶ月に及ぶ野生化豚の前例のない除去で、この島には 2006 年以来豚がいない。2004 年に 100 匹未満だったシマハイイロギツネは、現在 1,200 匹以上住んでいる。イヌワシは半世紀ぶりにこの島に成功的に巣を作った。2006 年以来、この島に巣をつくったハクトウワシはいない。 ⁽⁸⁾

実際には、野生化した豚の数が増えたのは、かつて生態学的悪役としてみなされた野生化した羊の殺傷と強制移住にその原因がある。餌をめぐって競争していた羊がすべて削除されると、豚の個体数が急増したのだ。TNC は、世界的な動物撲滅業者プ



<TNC のホームページ(左)> <PROHUNT が制作したマップ；GPS がつけられた豚の位置(右)>

ロハント⁽⁹⁾に豚の退治を依頼した。彼らは島全体にフェンスを張って、ワナをかけ、犬を動員して狩りをし、ヘリコプターで射撃をしたが、それでも豚たちは生き残った。ついに最先端の科学技術が動員された。雌豚を捕まえて生殖器を除去し、化学的方法で発情状態を維持させた後、GPS 追跡装置を植えて周りに集まった仲間の豚を殺すとしたものである。この戦略は、イエス・キリストを売り渡したイスカリオテのユダの名にちなんで「ユダの豚」(Judas Pig)と呼ばれ、効率性が非常に高い模範的事例として広く使われた。このプロセスは、「自然を保護する」という名目で行われた⁽¹⁰⁾。雌豚の友情と社会性、そして性的特徴は、友人を殺害するための「武器」として用いられ、これは「救済のための駆除」として正当化された⁽¹¹⁾。

ワシリー・スターネスクは、「一つの種の管理と殺害が別の種に対する管理と殺害を招く」事例として「ユダの豚」に言及し、このプロジェクトが生物多様性⁽¹²⁾と絶滅

危機種の保護を名分にしているが、実はエデンを連想させる公園の造成のためにコロンブス到来以後の動植物を「美観上よくない」という理由で「撲滅」したと主張している。この主張は、プロジェクトを推進した国立公園の前管理人の暴露によって裏付けられた⁽¹³⁾。美しく珍しい動物たちが暮らす原始自然に期待して島を訪れた観光客の目に、「家畜」である豚が走り回る風景は「不自然」だというマーケティングの判断の下に豚は除去の対象となった。豚は「環境」ではなく「美学的」理由で死ななければならず、彼らの死は自然の「保護」(protection)ではない、「生産」(production) プロセスの一部となった⁽¹⁴⁾。

2020年4月現在、TNCは2030年までに地球の30%を保護するという目標に、全世界に残っている野生の天然に近い生息地を買い取り、保存するという抱負を明らかにしている。しかし、彼らが明らかにした気候変動対策、土地と水の保護、持続可能な食料の供給、健康な都市建設という計画に

は、「保護」すべき自然も、「撲滅」すべき自然も、すべて人間の暮らしのために「背景化」されている。さらに、生物多様性を脅かす根本的な原因として相変わらず「侵略種」を指目する⁽¹⁵⁾。

2014年、韓国の環境庁は、国内の代表的な「生態系攪乱生物」としてヌートリアを挙げた。南アメリカに生息していたヌートリアは、1985年に毛皮製作と食用目的で輸入されたが、経済性が落ちるという理由で飼育を放棄する農家が続出し、野生に流出した⁽¹⁶⁾。牛浦沼のヌートリアは、いわば野生化種である。人間の必要によって家畜化されたが、再び野生に戻された／遺棄されたからだ。関連冊子には「食物連鎖攪乱により土着生物の数が減り、農林水産業に被害を与えるのはもちろん、病原菌を移し、2010年の生物多様性条約でも、生物多様性の保全のために侵入外来種の除去が決定された」というのが撲滅の理由として提示された⁽¹⁷⁾。2014年から2023年までヌートリアの「完全削除」を目指す退治プログラムに投入された予算は合計107億ウォンに達する⁽¹⁸⁾。「特定の種の除去を前提とした保全」は、生物多様性の概念が持つ限界とし

て必ず問い返さなければならない。

サンタクルス島の野生化豚と牛浦沼の野生化ヌートリアは、「有害」と規定されるや否や、「即時」撲滅の対象となった。問答無用の大々的な「即決処刑」であるわけだ。ここで「侵略」とは、生物学的な用語に聞こえるが、実際には非常に政治的な概念である。生命の尊厳を認めようとする変化の趨勢の中でも、侵略種に対してだけは感覚と意識の面で多大な「落差」が存在する。侵略種に対する「表現」が誇張されるほど、それに対する「対策」も過大となり、人間と侵略種の関係は、永久的かつ全面的な戦争状態として規定される⁽¹⁹⁾。

予防的殺害、予防的拘禁 - 「殺処分」と「保安処分」

アフリカ豚熱（African Swine Fever、ASF）の流行で飼育豚の「予防的殺害」が蔓延している。野生イノシシの捕獲と飼育豚の殺処分は「合法的殺害」という共通点がある。2020年1月、京畿道漣川（ヨンチョン）郡を訪問した。そこではただの一匹の豚も生き残れなかった。特定の地域で特定の種の動物が、いわば一時的にそして



<2014年に韓国の環境庁が国内の代表的な「生態系攪乱生物」として規定したヌートリア>

強制的に全滅させられたのである。政府は、漣川郡内のすべての豚を対象に対し、「殺処分」を指示した。（病気にかかったからとして殺してもいけないが）「病気にかかる前に」豚たちは死ななければならなかった。このような殺傷は、「予防のために」という名分だけで、検証も疑いもない状態で持続され繰り返されてきた。病気を移す主犯とされた以来、イノシシの優れたジャンプ力と水泳の才能は、感染経路の拡大要因としてしか解釈されなかった。「有害な」という修飾語以外の言葉は一切許可されなかった。

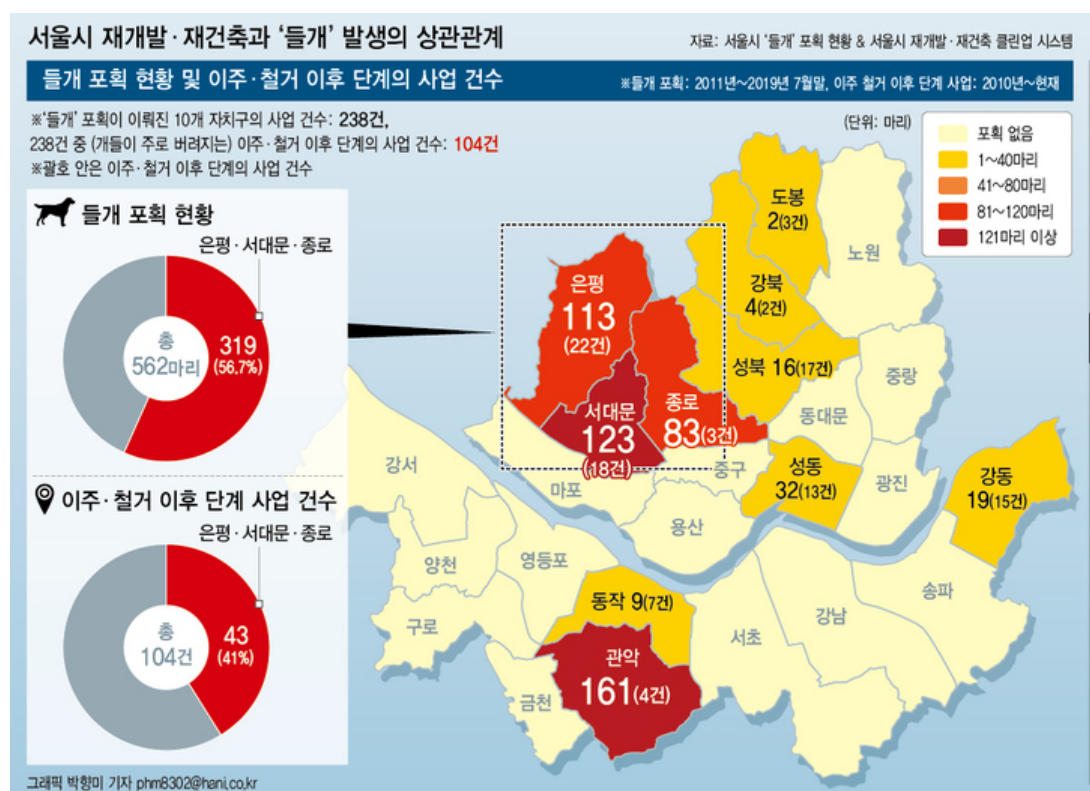
江原道では、2020年11月から「先制対応」として「広域狩猟場」を運営することが決定された。5つの市・郡に全国から集まった4千人の猟師が投入され、107日間展開される捕獲活動の報賞金は、野生イノシシ50万ウォン、キバノロ10万ウォンに策定された⁽²⁰⁾。ちなみに、「先制対応」は、おなじみの軍事用語である。

野生イノシシは今やアフリカ豚熱だけに連想される有害な存在になってしまった。

殺処分が感染の有無を問わず行われる予防的殺害であるように、予防的拘禁もまた、刑法に抵触する行為をしたか否かとは無関係に拘禁することをいう。重要なのは、予防的拘禁が刑法の変化から生じたのではなく、植民地戦争の緊急事態

が日常的に拡張したという点である。世界最初の収容所は、1896年にスペインが植民地での蜂起を抑えるためにキューバに建てた集団収容所だったという事実を想起しよう。

1975年に沖縄海洋博覧会が開催された当時、皇太子だった明仁が沖縄に足を踏み入れた。その際、警察は108人の「精神障害者として疑われる者」のリストをつくり、強制入院を含む予防拘禁措置を取ることを県の予防課に申し入れ、地域共同体もまたこのリスト作成に関与することで、隣人を摘発する治安の役割に加担した／動員された。警察と共謀して人々を拘禁する精神医療は、いわゆる「保安処分」と呼ばれた⁽²¹⁾。殺処分と保安処分は両方とも「疑い」だけ即座に殺したり閉じ込めたりすることができるメカニズムを持つという点が共通する。そして、このような「疑い」は密告と摘発に加担する／動員される隣人によって



<서울시再開・再建築と「野良犬」発生の相関関係>⁽²²⁾

推し進められることもある。これは動物と、動物の近くにいた動物の隣人との間でも見られる現象となった。

「野犬 (들개)」⁽²³⁾ は開発が沸き立つ所で生まれた。土地が着替えひっくり返され、そこに住んでいた動物と人間が再開発によって居所を離れることを強制された。生活の基盤を失った者は、飼っていた犬を捨て都市を去った。群れをなして生き残った犬たちは、いつの間にか「野犬」と名付けられ、危険で不潔だという理由で捕獲の対象となった。「野犬」はいわば「野生化犬」だ。家畜化された豚が再び野生で生きようになったように、野生化犬の祖先は伴侶犬である。特に、山で生まれ山で育った野生化犬は「法的アイデンティティ」を持っていない。「動物保護法」を適用できる遺棄犬でもなく、「野生動物保護及び管理のための法律」を適用できる有害野生動物でもないからだ。有害野生動物ではないため射殺

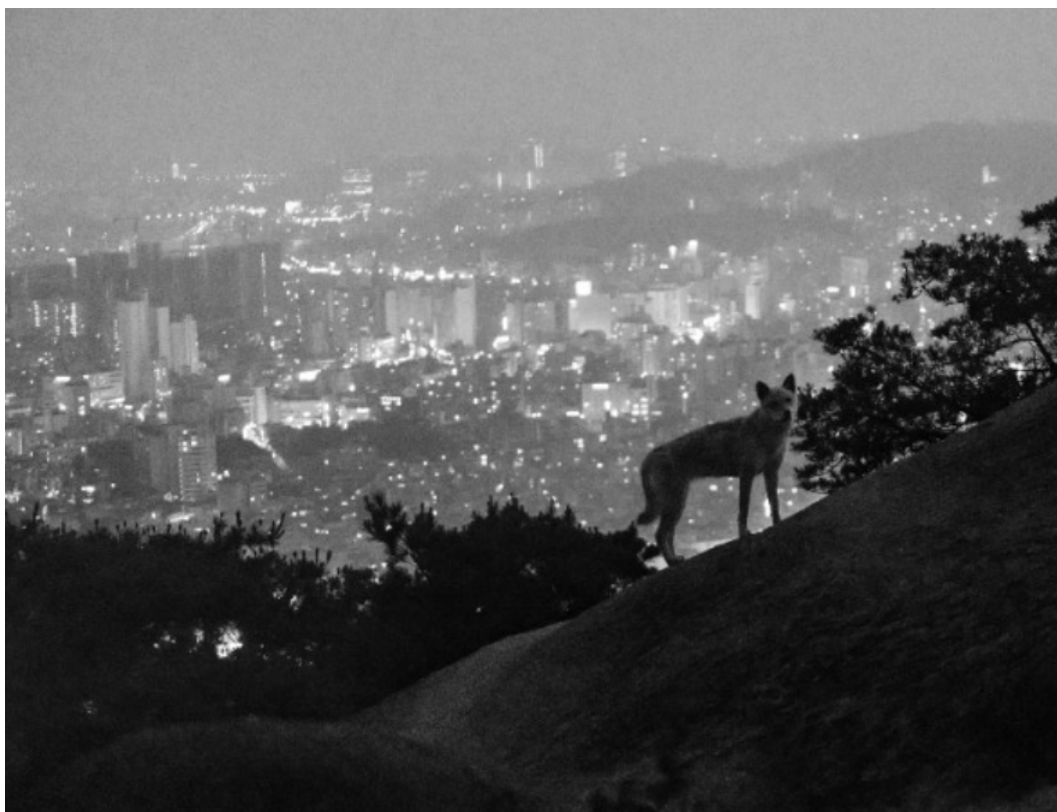
することはできないが、捕獲後、受け入れ先が現れない場合、「安楽死」させられる。正確な個体数も把握されてない⁽²⁴⁾。

捨てられた犬たちは山に消え、追い出された人たちは、都市から姿を消した。彼ら見えなくなった理由は、「場所」を奪われたためだ。この時期に西大門区庁では、低所得層を対象にして野生化犬の捕獲枠を管理する公共勤労者を募集した。「失業者または定期的な収入がない日雇い労働者」や「行政機関や公信力のある機関からホームレスであることが証明された者」に野生化犬を捕獲する「資格」を与えた⁽²⁵⁾。押し出された者たちが生き残るために押し出された他者である動物を売り渡す関係が生成された。お隣だった彼らは今、互いに生き残るための奮闘をしているのである。野生化犬の捕獲に動員された日雇い労働者や野宿者に「加担」という表現を駆使してしまう前に、野生化犬と彼らの関係を歪曲する

権力の磁場に目を配らなければならない。「動物は社会的に構成さる」ということか。では、我々はどのような社会・経済的条件の下で、どのような動物を構成する世界に住んでいるのか。

侵略種と難民の間を往き交い増幅される嫌悪

土着 (native)、国家 (nation)、自然 (nature) は、「出生」と関連した意味のラテン



<写真；クォン・ドヨン作家>

語の「natio」を共通の語根に持つ。これらは保護し、維持すべき対象とされてきた。そのため、外来種を「侵略的他者」と規定するレトリックは人間社会の移住政策と共鳴する地点がある。2014年夏、「未成年移民」がメキシコの国境を越えて米国に到着した。強姦やギャングの暴力を避けて、南米各地から長い道のりを離れてきた子供を乗せたバスは、子どもたちの入国に反対するデモ隊に遮られた。テキサス州のある共和党員は、この事態を「侵略」と規定して、米国憲法第1条9項を引用して、「議会は侵略発生時、軍を要求する権限を有する」と述べ、「病原菌」と「色ある人々」を連鎖的に想像する米国の「病んだ移住民」の神話は、国境を越えた子どもたちに向けた反移民情緒として噴出された。当時、オバマ大統領は、この事態を「国境での緊急な人道主義的挑戦」と表現した半面、保守的性向のラジオでは「子供たちがもたらす人道主義的災難であり、市民に対する脅威である」と表現した⁽²⁷⁾。

アメリカ南部の国境地帯をめぐる騒動が続く中、「移民者」が米国「市民」の健康と安全を脅かすという大衆的不安が広がった。同じ時期、米全域で在来種の生息を脅かす侵略種動植物の撲滅が大々的試みられたことは、注目に値する。2014年を前後に米国において侵略種の動植物や移民者に対するイメージが重なり、不潔、病原菌、衛生、個体数の過剰、資源枯渇、美観の欠如、貧困、旺盛な繁殖力など、植民地主義的人種差別的な用語があふれていた。

「土着種」と「侵略種」を規定するメカ

ニズムは、「国民／市民」と「難民」を同時に量産するメカニズムに似ている。ここで問題視しなければならない点は、差別の作動方式がただ「似ている」というのではなく、嫌悪を牽引する社会的情緒が侵略種と難と民間を行き交い、「増幅される」ということだ。「COVID-19 事態」を目撃しながら隔離、追放、退治、妨害、撲滅などの用語が蔓延している日々の危機感は、2018年に難民申請のために済州に入ってきたイエメン人たちとアフリカ豚熱が出回った2019年以来ずっと捕獲対象となったイノシシに向かって帯びられた嫌悪の言葉を再び思い浮かばせる。これらの危機感を「侵略種」⁽²⁸⁾レトリックに対する反撃あるいは再領有を模索するきっかけとすることができるとするならば、それはどのように可能だろうか。「倫理」を意識しながらも「当為」に帰結されない言葉や運動はどのようにつくっていけるだろうか。

「生命派生商品」(lively commodity)、ジェンダー偏動的な動物の利用

フェミニスト動物権研究者であるキャロル・アダムス (Carol Adams) は、女性の体に対する統制と動物の体に対する統制の類似性について、女性と動物を抑圧する諸権力がどのように絡み合っているのかを明らかに、これを指して「性-種システム (sex-species system)」と名付けた。女性と動物の体を手段化し、性的に対象化するシステムは、肉食とポルノグラフィーを介して行われ、動物に対する極端な暴力と女性に対するそれが関連していると主張し

た。今ここに絡んでいるもう一つのメカニズム、資本主義を語る時だ。

家畜を意味する「livestock」は文字通り「生きている在庫」という意味である。動物は、牛乳、卵、精液などを作り、生産過程で労働を提供すると同時に、それ自体の商品でもある「生命派生商品」(lively commodity)⁽²⁹⁾である。例えば、牛の精液は、高い成功率と統制可能性を理由に、人工授精を好む酪農業者によって国際的に取引される商品である。2～3日に1回、牛からの精液を採取するために雄牛を制圧し、麻酔なしで直腸に電気針を挿入して前立腺に電流を流すことによって、「意志とは関係なく」射精するが、興奮するか否かに関わらないので効率的だとされている⁽³⁰⁾。

このような過程で、商品価値とは無関係な他の個性は完全に無視され、雄牛のアイデンティティは、市場の力に従属されてしまう。ジェンダー偏向的な動物の利用には、生殖、体、性に対する人間の規範が反映されているが、特に繁殖力と妊娠が強調される。動物を雌と雄、生殖能力の有無に分類することで、性とジェンダーの二分法で動物を概念化している点に注目しよう。侵略種「雌」の「制御不可能な」生殖能力は「撲滅」の理由になるが、「制御可能な」農場の「雄牛」の生殖能力低下は「処分」の理由となる。生殖能力そのものを問題視し、動物に加えられる極端な搾取を常識にするレトリックには、人間が動物の生殖能力を「コントロールする」ことそれ自体に対する省察が省略されている。

京畿北部のある地域農家を訪問したとき

のことである。妊娠した状態でだけ母乳が出るため、畜舎の中に集まっていたまだら牛60頭余りは5年間妊娠した状態で過ごした後、屠殺される。生まれたばかりの子牛を見せてくれた農場主は、「まだら牛がヌロンイ(注:「きいろ」毛が黄褐色である、韓牛のこと)を産んだ」と喜んでいて、60頭のまだら牛ははヌロンイの「代理母」として妊娠状態で毎日牛乳を生産し、年間に一回ヌロンイを生むという。代理母まだら牛の子宮に「優秀な雄牛(韓牛)」の受精卵を着床させることが「慣行」になった理由には、韓牛がまだら牛より7倍高い価格で売れる市場の論理がある。「代理母と牛乳生産を同時に」という発想は、大企業OO牛乳協同組合で提案された。牛乳の生産にだけでは生計が難しくなった小農家に研究所の人たちが受精卵を移植してくれて受精卵と出張費を合わせ一回当たり45万ウォンを取りまとめていく。失敗の負担は、すべての農家に回される。〇〇牛乳協同組合に加入しなければ、農場を維持することは難しくなっている。小規模農家の選択肢は非常に限られている。

牛乳を生産すると同時に、代理母として子牛を生産するまだら牛も、精液を生産する雄牛も「生命誘導體」であるわけだ。このように牛たちは商品の循環回路を延々と再生産する。そして、このような過程で牛の体は分節され、卵子、精子、胚、子宮、乳房などの身体器官がすべて分離されたままの生産過程に編入されりため、体の統合性や存在としての全体性を維持するのがより難しくなる。

「侵略種」「雌」レトリックをクィアの観点から再専有する

欧米の白人「土着民（ネイティブ）」たちの移民に対する長年のメタファーとして「雌」（Female）という表現がある。外国人女性は、「旺盛な」出産力や「制御不能の」生殖能力と結びつくような想像は個体数過剰にもたらされる経済的負担が、最終的に白人「土着民」たちに向けられ、将来的にはその負担がさらに増えることをほのめかし照らしている⁽³¹⁾。

このように性と人種の差を示す権力が交差するところで、侵略種の生殖能力を統制しようとする試みが捕捉される。例えば、100%の受精確率で一度の産卵期に数回産卵し、年間150万個の卵を産むコイの個体数調整のため、毒殺や商業的収穫という方法以外にも、遺伝子組み換え技術である「雌の除去技術」（Daughterless technology）によって、将来の子孫を「雄」に限定しようとする方法が検討されているという。性と生殖能力が同一視されることで、雌の体はそれ自体で侵略種を特徴づける大きな脅威となった⁽³²⁾。

出産の性として「雌」という名詞を使用すれば、生殖能力が女性のアイデンティティの革新的な特徴とみなされるだけでなく、身体と人格の性が合致する女性は「自然」に、そうでない女性は「不自然」にそれぞれ配置される。これは、固有の個性を抹殺し、女性たちの間に分離をもたらすが、まさにこの地点でクィアの視点で「侵略種」「雌」というレトリックを反論したり、再

領有することができる、隙間が開かれる。クィア理論は、両極端な性別カテゴリとそれによる属性などを本質的かつ固定不変なものとして思わせてきた「権力の動作方式」そのものを問題視して、他の生き方の可能性を提案するものであるからだ。ナヨンは「現在の二分法のカテゴリでは自分自身を説明することができない人たちが新たな談論をつくり、規範との認識を変化させながら、自分自身を表現する言語を探していくこと」⁽³³⁾の大切さを述べている。

ルインはこう尋ねる。「たとえば、クィアという用語や概念が存在しなかった16世紀に創作された文学作品に非規範的ジェンダー／セクシュアリティを実践する人物がいたら、この人物をクィアとして解釈することができるだろうか」。これはクィアとして解釈できるかどうかを尋ねる問いではない。特定の時代の非規範性が生産される方式、そして非規範性を通じて規範性が作動する方式を問うているのだ。これがまさにクィア理論の認識論的土台をなす。クィア理論はクィア的存在を発掘する作業ではなく、このような認識論を介して、新しい質問を作り出す作業だ⁽³⁴⁾。

クィア理論家のリー・エデルマンは「自然」と「自然化」を、国家によってあるいは国家に代わって日常的に駆使されている政治化されたレトリックとみなし、未来と出産を関連付ける「生殖未来主義」（Reproductive Futurism）と呼ばれる概念に問題があると指摘する。これはクィアの個性と主体性を未来の欠如に帰属させる概念だからである。エデルマンは、この概念

に対する解釈を転覆して反撃に出そうと言っている⁽³⁵⁾。クィアの「生来の素質」、すなわち「生まれつきの脅威」と言われてきたものが未来の損失を招くという攻撃を、むしろ積極的に引き出そうと主張しているわけだ⁽³⁶⁾。未来に対するクィアの脅威は、彼ら／私たちを抑圧する言語、政治、社会の構造を、それら／私たち自身が破壊する手段となる。「生殖未来主義」でいう自然は生殖を命令する力によって政治化されるが、エデルマンは生殖の命令を拒否することで、自然の意味を再領有する。したがってクィアの視点から見ると侵入種という存在は、「バランスのとれた」自然のシステムや「予定された」未来に対して根本的に違反している「反逆的な主体」として解釈される余地を持つようになる⁽³⁷⁾。

フェンスを飛び越え、川を渡って生き残ったイノシシと牛浦沼のヌートリアをクィアの観点から見ると、バランスのとれた自然と予定されて未来という堅固な前提を問い返す存在と言えるようになる。この時、侵略種は、「クィアの不確定性を積極的に利用しよう」というナヨンの言葉のように、「私たちを絶えずカテゴリの内にに入れて、規制し、規律しようとする権力と言説の場を揺るがし続ける存在」として再専有される⁽³⁸⁾。

このように「侵略種」「雌」をクィアの観点で再領有するには「自然」と「未来」を異なる方式で規定しようとする新たな修飾語が必要である。既存の世界を支えてきた便利な言葉ではなく、一つ一つの事例の中からすくい取った具体的で粗野な言葉で

「別の」未来を提供する力はクィア的思惟と実践のなかにその糸口を見つけることができないだろうか。

また、生殖未来主義に対する拒絶は、正常家族イデオロギーの解体や家族の再構成の可能性を抱いている。正常身体中心主義、能力主義、貧困でない異性愛家族秩序。今までこれらを強固にする過程の外郭にいる存在たちはこれらの家族秩序の根幹を揺るがす危険でいけないものとして配置されてきた。関係を結ぶ権利さえ侵害された人に、「家族を構成する権利」とは、原家族とは異なる意味での家族を作ることを超えて、「家族を作ってはいけない」とされてきた人に烙印を押し、「見えない存在」になることを強制してきた社会に介入することという。

脱施設運動もまた、単に施設を離れることを超えて、主流が想像してきた価値を變形することを意味し、「正常な」人間の価値と関係的生の規範を「クィアリング」する実践の過程になければならない⁽³⁹⁾。人間の層位にとどまる家族構成権の限界をさらに押していけば「成員権」、すなわち「共同体の構成員として認められる権利」まで言えるのではないか。この時、初めて共同体の成員としての動物を含む誰も後ろに残さない努力が始まるだろう。

パンデミックの現在的起源、巨大農畜産業を「問題化」する

進化生物学者ロブ・ウォラス (Rob Wallace) は、鳥・豚インフルエンザの病原菌が最初に現われた場所が、産業化された

都市や産業経済に変わりつつある都市周辺の集約的農場であった点に注目する。1959年以降、高病原性に進化したインフルエンザ・ウイルス39種のうち、2種を除いて残りはすべて、数十万匹の家禽類を飼育する商業的農場で発生した。SARSとCOVID-19ウイルスの起源はより複雑であり、遺伝学的研究を考慮してみると、野生食品の取引がこれらのウイルスの出現に大きな役割を果たしたという。しかし、ウォラスはCOVID-19が悪名高い武漢の野生動物市場で始まったのか、その近郊から伝染してきたのかは重要でないと断言する。それよりは、「生命体が商品になる現実の中で、家畜の生産農と加工業者を経て小売業者につながる生産ライン全体が疾病の媒介となる可能性がある」という点に我々の視点を合わせることを要請する⁽⁴⁰⁾。このような主張は、病気の媒介体であり、センザンコウやコウモリに繰り返し言及するマスコミの論調とは全く異なる層位にある。

< Charoen Pokphand、Bernard Mathews、Tyson Food のロゴ>

世界保健機関（WHO）は、2015年に病気や伝染病を命名する際に、地域の名前を

付けないように、という指針を発表した。2009年に新型インフルエンザが「メキシコ・インフルエンザ」と呼ばれ、特定の地域に烙印を押す副作用を生んだという指摘によるものだった。COVID-19も、発源地と目された地域の名前を付けて「武漢ウイルス」と呼ばれ、議論がされた。実は、ウイルスをより正確に命名するには「地域名」ではなく「企業名」が必要かもしれない。悪性ウイルスを発生させた巨大農畜産業の工場が確認されれば、バーナード・マシューズ（Bernard Mathews / 英国の家禽加工会社）、チャルンポーカーバン（Charoen Pokphand、CP / タイの家禽加工会社）、タイソン（Tyson Food / アメリカの食品会社）などの会社名を付けたウイルスが出てくるかもしれない⁽⁴¹⁾。

世界初の新型インフルエンザ感染が確認された0番患者は、メキシコのグランハス・カロール（Granjas Carroll）の農場から出てきたという事実注目しよう。伝染病が広がった農業会社グランハス・カロールは、米国のスミス・フィールドの子会社である。この会社は、小さな農場を統合して、年間80万頭の豚を飼育しているが、排泄物の処理に対して何の規制も受けなかった。米国での規制が強化されると、まっすぐ東欧に



< Charoen Pokphand、Bernard Mathews、Tyson Food のロゴ>

移って、政治家を包摂し、EUの農業補助金で飼育場、屠畜場、飼料工場まで備えた生産設備を建て、再び「豚」を「生産」した⁽⁴²⁾。

上記の事例は、巨大農畜産業（Agribusiness）に対する綿密な批判なしには、グローバル伝染病の実態を十分に窺いことはできないという事実を物語っている。中国経済が自由化し、10年の間に数百万人の農村での海岸の広東省に向かってかつてない規模の移住をした。農業技術と農村の所有構造が変わって、家禽類の生産規模は数億羽単位へと膨らんだ。したがって、「地域」は、病原菌発生地以上のことを我々に教えてくれる。公共政策と社会の慣行にしたがって作られる地域の条件が、他ならぬウイルスの進化形態を決定づけるからだ⁽⁴³⁾。

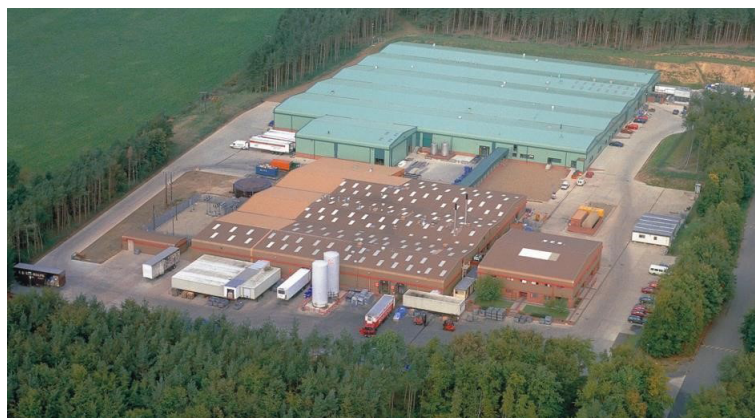
「産業型インフルエンザ」を追い出すのはワクチンの開発や動物の「予防的殺害」ではなく、より根源的で直接的な理由となる「産業的家畜生産」を終わらせなければならない。動物の話は、このように性－種－資本主義、動物－ヒト－企業などに絡まれた構造の分析とともに、よりきめ細かく語らなければならない。また、この仕組み

を容認する法と制度、政府政策を問題視することも重要である。米国では、これらは9.11以降、アメリカで軍事主義との共謀につながった。

「エコ・テロリスト」という言語矛盾 - 「緑」はどのように犯罪になったのか

アグ-ギャグ法（Ag-Gag law）は、農業、特に食べるために動物を飼育する施設内の活動を記録し保存することを禁止する州政府の法である。畜産業の現場での動画撮影、音声録音、写真撮影を禁止する、事実上の内部告発防止法である。重要なのは、米国のいくつかの州では法律が可決され、活動家と研究者の間では、法案によって訴えられるかもしれないという恐怖の雰囲気造成されたという事実である。アグ-ギャグ法案は、1990年にカンザス州で最初に可決された。

農業現場や動物を利用する場所へのアクセスを制限する法案が、米国各地で本格的に現れるようになったのは、2001年9月11日以降、いわゆる「愛国者法（Patriot Act）」として知られる反テロ法が可決され



＜英国的家禽加工会社 Bernard Mathews の工場全景と内部＞

てからだ。当時の米国政府は、テロリズムを「政治的あるいは社会的目的を達成するために、政府や民間またはその一部を脅かしたり強圧しようとする手段として、人と資産に対して力と暴力を違法に使用する行為」と定義した。米国政府が定義する「民間」は何を指すのかよく考えてみる必要がある。

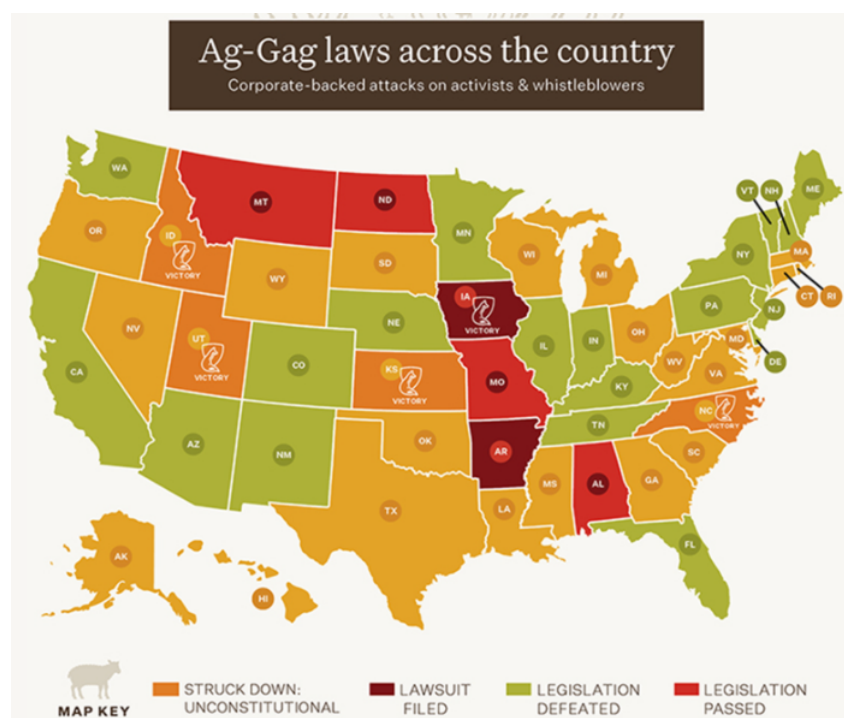
＜アグ・ギャグ法が立法された地域（赤表示）と立法に失敗した地域（緑）＞ ＜動物権直接行動に対する警告文＞

その後、アメリカ政府は領土内で発生する「国内テロリズム (Domestic Terrorism)」もテロリズムのカテゴリに含めた。1992年に制定された「動物企業保護法 (Animal Enterprise Protection)」を修正した「連邦動物企業テロ法 (Animal Enterprise Terrorism)」が2006年に可決

された。後者は前者を拡張した法で、成功した陰謀と未遂の両方に適用された。パトリオット法が規定している国内テロリズムの定義は、動物関連企業に対する直接行動に参加する人々を標的としている。動物企業テロ法は「民間」企業の利益のために動物権と環境保護活動をテロと規定し、「エコ・テロリスト (Ecoterrorist)」と「動物権過激派 (Animal Rights Extremist)」のような用語を駆使して、いわゆる「緑の恐怖 (Green Scare)」を助長することで、あらゆる形態の反対意見にくつわをはめた⁽⁴⁵⁾。

軍事主義 / 資本主義と絡まった工場式畜産の系譜 - 韓国の場合

韓国各地で大洪水が発生した2020年の年夏、屋根の上に上がった牛が話題になった。1960年代にも大洪水の時に屋根の上に上がった牛が新聞に報道されたことがあるが、主人に会って牛小屋に戻った牛はまぐさで元気を取り戻し、田と畑を行き来す



＜アグ・ギャグ法が立法された地域（赤表示）と立法に失敗した地域（緑）＞⁽⁴⁴⁾ ＜動物権直接行動に対する警告文＞

る労働の日常に復帰した。2020年の夏、屋根の上から「救出」された牛は畜舎に戻ってすぐに屠殺されてクッパ用の肉として売りに出された。現在の工場で飼育される牛は草原を見たことがない。かつて牛小屋と田畑を行き来しながら労働した牛は、主に草を食べ育ったが、最近の牛はトウモロコシと大豆を原料として作られた飼料を食べている。

では、韓国での工場式畜産はいつ、どのように始まったのだろうか。韓国戦争中の1952年から米軍基地が駐屯する38度線の境界に接した地域である東豆川には、基地建設と同時に大規模の屠殺場ができ、基地周辺の住民に豚の飼育が奨励された。すると、米軍が食べない豚の内臓などをもらって商売をする人たちが多くなり、「スンデ・タウン（スンデは豚の腸詰）」が形成された。米軍基地は周辺の食文化にも大きな影響を及ぼした。2004年以来、東豆川の米軍は平澤に移転し、2021年現在は2千人余りが残っている。屠殺場はなくなり、約150以上の畜産農家も6か所に急減した。スンデ・タウンも小さな規模に縮小された。

韓国の畜産業は、飼料穀物を輸入して牛に与える方法で成長した。世界的に畜産と穀物の継ぎ目が強化されたのは、1960年代～70年代の「緑の革命」(Green Revolution)⁽⁴⁶⁾の広がりとの関係がある。飼料穀物の生産が増加するにつれて1980年代以降、農産物の自由貿易が拡大され、工場式畜産と契約営農の結合を中心に畜産の産業化が本格化した。韓国の畜産業は、米国、アルゼンチン、ブラジルで生産された

飼料穀物に依存して成長してきた⁽⁴⁷⁾。

韓国戦争中に米国の「農産物貿易促進援助法」に基づいて、米国の「余剰農産物」が韓国に大量に流れ込まれたが、これは結果的に韓国の農業生産基盤に打撃を与えることとなった。このような状況の中、1960年代末の経済危機を解消する手段として、米国は余剰農産物を無償援助する代わりに、商業取引を開始した。これに対して韓国は米や麦などの自給を急ぎ、1970年代半ば以降、主穀の自給が行われると、外国産農産物の輸入を開放し、米国産牛肉と豚肉も並行して輸入した。1978年の「輸入自由化の基本方針」が確定され、消費者の食卓に輸入肉が頻繁に登場することになった⁽⁴⁸⁾。

1980年代から牛肉の輸入量が急増し、自給率が急落するようになり、政府は畜産奨励政策を繰り広げた。緑の革命に全盛期を迎えた輸入飼料穀物依存型畜産と密集飼育型畜産は、韓国の農業において重要な位置を占めるようになった。しかし、畜産部門の高い生産額がそのまま畜産農家の所得に直結するわけではない。投入財と飼料費などの支出が多いためである。所得が低いから経営規模を拡大する悪循環の構造が生まれた⁽⁴⁹⁾。

韓国の工場式畜産は遠い国の政策と密接につながっている。飼料穀物の輸入により「牧草地のない畜産」が可能になったことに注目したい。飼料穀物の対外依存は、多国籍農企業、特に米国農企業の直接・間接的な海外進出とかみ合って、機械、設備、薬品への依存につながった。国境を越えて

生産、加工、流通につながる全過程を支配している多国籍農企業は一つの分野ではなく、関連するあらゆる分野に進出し、支配力を拡大してきた。このような経済的脈絡から韓国の工場式畜産の問題は、米国の農業政策と分離して語るができない。

鶏の場合、ほとんどの養鶏農家は「ハリム」のような肉鶏企業と契約を結ぶ。企業がひよこを供給し、農家が飼育するという仕組みだ。このような過程の中で、農民は生産過程の支配力を失うことになり、企業との関係でも交渉力をほとんど失うことになってきた。これから動物たちの「場所」は農家、大企業、国家政策、多国籍企業の支配力、軍事主義などと共に、より繊細に分析し議論していきたい。

エピローグ——異なる関係、異なる生を想像する

2018年9月、米国カリフォルニア州のある養鶏場で鶏9羽が救助された。当該施設は牧歌的なイメージで思い描かれるような「動物福祉農場」として宣伝されてきた。しかし、密集飼育されている鶏の中には、病んで負傷したニワトリだけでなく、既に死んでおり、そのまま放置されているニワトリもいた。内部告発にも監督官庁が動かず、「公開救助 (Open Rescue)」を主要活動とする動物権団体 DxE (Direct Action Everywhere) は救助に踏み切った。公開救助とは、農場、屠殺場のように動物に対する暴力が発生する現場に侵入し、状況を公開し、監禁された動物を救助する活動である。救助されたニワトリのうち、関係当局

によって安楽死せずに生き残ったニワトリに付けられた名前から名付けられた「ローズ法」(Rose's law) 制定運動が世界的に展開されている。また、次のような動物の法的権利を骨子とした「動物権利章典」⁽⁵⁰⁾ が宣布された。

DxE 韓国支部 (DxE コリア) の救助活動は、人間の財産や物ではない、「生命」としての動物が当然享受すべき生活と未来を奪還する直接行動である。2019年の夏、彼らは「喜びと悲しみ、苦痛を知って感じる存在に対して振るわれる暴力を黙認できない」という理由で、工場式畜産の残酷な実態に対抗して公開救助に乗り出した。生後2週間目の豚を救助し、「セビョク (夜明け)」と名づけ、一生住むことのできる住処となる「サンクチュアリ (農場動物の安息所)」を作った。「ブタ泥棒」、「財産窃盗と損害」という非難が殺到した。セビョクは名前が付けられるまでには徹底的に食用動物として、「死ぬため」に生まれた豚だった。効率的な生産環境を保つために、飼育の便宜のためにしっぽを切られ、歯を抜かれ、去勢された。大多数の飼育豚のように時間と空間の監獄の中で持ちこたえ、生後6ヵ月で屠殺される運命だった。

検索窓に「セビョク」と「豚肉」を入力すると、「豚肉を夜明けにも配送してあげます」という関連リンクが続々と並ぶ。「豚肉」と「夜明け配送」の並列には豚を飼って、豚を分解して、豚を包装して、豚を家の前までそれも夜明けに運搬する労働の全過程が省略されている。動物の最も近くで働く畜産関連労働者は、大半が移住労働者であ



セビョクが新しい生活の場である「サンチュアリー」でスイカを食べている。(写真出典:ハンギョレ新聞 20200603)



屠鶏場入口をふさいで動物権利章典を宣言し、業務妨害の疑いで裁判にかけられた活動家たちの控訴審連帯要請ポスター (写真出典:DxE コリア)

るという事実も同時に見えなくなる。韓国社会の安穏な日常は、「関係者以外立ち入り禁止」と書かれた区域の畜舎で、動物と移住労働者の労働を土台に支えられているが、「私たち」はお互いにまともに出会ったことがない。では、何が私たちを出会えないようにするのだろうか。

左: セビョクが新しい生活の場である「サンチュアリー」でスイカを食べている。(写真出典:ハンギョレ新聞 20200603)

右: 屠鶏場入口をふさいで動物権利章典を宣言し、業務妨害の疑いで裁判にかけられた活動家たちの控訴審連帯要請ポスター (写真出典:DxE コリア)

一方、救助されたセビョクが鼻で土を掘り返して、泥風呂に入り、日差しを浴びながら見せてくれる「異なる生」は、鶏と豚を含めて「農場動物」と名付けられた動物たちが人間のための「食品」としてのみ想像されることに対する強い異議を唱えている。豚の寿命は10年から15年、鶏は7年から13年といわれている。しかし豚とニワトリは食品として生産・消費される過程においてそれぞれ6ヵ月、1ヵ月ほど生きることが許されている。ある存在に「時間性がある」ということが、特定のイメージ、特定の瞬間の姿でその存在の一生涯を判断したり裁断したりせず、時間によってその存在が「変化」を経験し「関係」を結び、生きることを認識するという意味であれば、豚とニワトリは存在の真っ当なあり方はおろかその時間性までも剥奪されているのである。このような認識は、民族、国籍、ジェンダー、性的志向などを不変の現象だと見なす社会で特に著しい。それは生きていて経験してきたことが時間の中で解釈されないからである。

DxEの活動は救助した動物たちの日常を通じて動物の生活が関係的事であることと存在の真っ当なあり方を見せることで何よりも動物たちに時間性があるということ、「生涯」があるということ、この社会に老いた豚たちを治療できる獣医師が必要になる時が来ることを悟らせてくれる。いまこそ、

異なる関係、異なる生を想像する時だ。



[付記]

本論文は、琉球大学で2021年2月6日に開催された国際学術セミナー「軍事的暴力と動物」で発表した内容をもとにしています。

翻訳監修：イママサ・ハジメ

註

(1) 2017年の冬に始まった動物権活動・勉強会 ALiM: (Animal Lights Me:) の仲間たちと一緒にだった様々な活動や研究を通してつくりあげた「共同の言葉」と「新しい関係」の磁場の中でこの文を書くことができたことに感謝したい。

(2) 전혜인, 『퀴어 이론 산책하기』, 도서출판 여이연, 2021년, pp.9 - 11.

(3) Private Military Company の略語。

(4) TNC は世界でも裕福な環境団体の1つだ。過去の理事会および諮問委員には石油会社、化学製品生産者、自動車メーカー、鉱業と伐採業者、石炭燃

- 焼電気会社の役員が含まれており、彼らの一部は数百万ドルの環境罰金を支払った経歴がある。TNCはテキサス湾の絶滅危惧種鳥類の生息地に天然ガスパイプを突破し、バージニア州東部海岸の住宅開発に乗り出し、シリアル、コーヒー、クレジットカードなどに名前とロゴを賃貸して資金を稼ぐ。David B. Ottaway & Joe Stephens, “Nonprofit Land Bank Amasses Billions,” *The Washington Post*, 2003.5.4.
- (5) 「野生化」は「Feral」の訳語で、家畜化した動物が再び野生状態で暮らすことになる場合を指す。
- (6) The Nature Conservancy のホームページ (最終検索日: 2020 年 3 月 27 日)。
- (7) 英文資料には野生化動物を殺す行為を示す表現が状況と観点によって違う形で使われる。本稿では脈絡を生かして殺害 (killing)、殺傷 (slaughter)、除去 (removal)、撲滅 (eradication)、退治 (extermination) に分けて翻訳した。
- (8) TNC ホームページ (上同)。
- (9) ニュージーランドの民間営利会社プロハント (prohunt) は、報告書として有蹄類 (蹄を持った動物) の「撲滅」を成功させた事例を公開している。サンタクルーズ島で行われた「ユダの豚」作戦もまた非常に成功した事例として紹介されている。Norm Macdonald & Kelvin Walker, “*A New Approach for Ungulate Eradication; A Case Study for Success*,” CA, Prohunt Incorporated 2008. このような会社は、民間営利会社ではなく、民間軍事企業 (PMC) と呼ぶべきだ。実際に、ドローンを利用した有名政治家の暗殺とドローンを利用した動物の殺傷 (個体数調節) は、同じ技術によるものだ。未来の戦争技術として想像されるドローン攻撃は、動物たちにはすでに迫っている現実である。ガラパゴス島でウミガメを保護するために野生のヤギをドローンで殺傷する事例がある。
- (10) Vasile Stanescu, “The Judas Pig: The Killing of “Feral” Pigs on the Santa Cruz Islands, Biopolitics, and The Rise of the “Post Commodity” Fetish,” *The Ethics and Rhetoric of Invasion Ecology*, Lanham · Boulder · New York · London, Lexington books 2017, p.67.
- (11) しかしこのような論理は「バランスの取れた生態系」を前提とする時にのみ成立する。統合的で平衡的な状態と仮定された生態系は「神話」に過ぎず、人間が「調節」できる自然の均衡に対する非科学的観念との共鳴はこれ以上保存のための適切な土台にならないという主張が出て久しい。O’ Neill, Robert V., “Is It Time to Bury the Ecosystem Concept? (With Full Military Honors, of Course!)”, *Ecology* 82, no.12, 2001 年 12 月号, pp.3275~3276
- (12) 「生物多様性条約」第2条によると生物多様性 (biodiversity) とは、「陸上・海上その他の水中生態系とこれら生態系が部分をなす複合生態系などあらゆる分野の生物体の変異性をいい、これは種内の多様性、種間の多様性及び生態系の多様性を含む」と定義している。下記の国家生物多様性情報共有システムホームページを参照。
- (13) Vasile Stanescu, p.63.
- (14) Vasile Stanescu, pp.69 - 70.
- (15) TNC ホームページ (最終検索日: 2020 年 3 月 27 日)。
- (16) 環境部、「外来生物流入に伴う生態系保護対策」、環境副スポークスマン室、2014 年、p.3.
- (17) 環境部、p.4.
- (18) 環境部、p.21.
- (19) James Stanescu, “Alien Ecology, Or, Learning How to Make Ontological Pluralism,” p.17.
- (20) 『連合ニュース』 2020/11/10.
- (21) 도미야마 이치로 지음, 심정명 옮김, 『시작의 앞 - 프란츠 파농의 임상』, 문학과 지성사, 2020, p.157.
- (22) 이문영, 「개는 산으로 사라졌고, 사람은 ‘밖’으로 사라졌다」, 『한겨레신문』 (2019/12/14) 최종검색일: 2021 年 2 月 4 日.
- (23) 韓国に「種」に定着した野犬はいない。動物権団体などは「野良犬」が人間の遺棄責任を犬に回して「危険な存在」と烙印を押す用語だとし「野生化された遺棄犬」という表現を使う。
- (24) 이문영, 「포획충에도 살아남은 쫓쟁이 - 여기, 도시가 버린 ‘유기구역’」, 『한겨레신문』 (2019/12/07) 최종검색일: 2021 年 2 月 4 日.
- (25) 同上。
- (26) Banu Subramaniam, “Spectacles of Belonging: (Un)documenting Citizenship in a Multispecies World,” *The Ethics and Rhetoric of Invasion Ecology*, pp.88~89.
- (27) Laura Murphy, “The Mexican ‘Germ Invasion’

- is Just the Right' s Latest Anti-Immigration Myth," *The Guardian*, 2014.7.2.
- (28) 韓国では「侵略種 (invasive species)」ではなく、「侵入外来種 (invasive alien species)」という言葉が公式的に使う。「本来の原産地又は生息地から外れた地域において生物多様性を脅かす生物」と定義される。環境部、p.30.
- (29) 캐스린 길레스피 『1389 번 귀 인식표를 단 암소』, 윤승희 옮김, 생각의길 2019, pp.22-23 쪽.
- (30) 캐스린 길레스피, 앞의 책, pp.270-272 쪽.
- (31) Kelsey Cummings & Kevin Cummings, "Welcoming the Stranger: Coercive Reproduction and Invasive Species," *The Ethics and Rhetoric of Invasion Ecology*, p.106.
- (32) Kelsey Cummings & Kevin Cummings, p.107.
- (33) 나영 「페미니즘과 퀴어, 그리고 적녹보라 패러다임」, 한우리 외 『교차성 × 페미니즘』, 여이연 2018, pp.122-123 쪽.
- (34) 전해인, 앞의 책, p.9.
- (35) Lee Edelman, *No Future: Queer Theory and the Death Drive*, Durham, NC, Duke University Press 2004, pp.12~13.
- (36) Kelsey Cummings & Kevin Cummings, pp.110-12.
- (37) Kelsey Cummings & Kevin Cummings, p.113.
- (38) 김순남, 「강제된 장소, 강제된 관계를 질문하는 탈시설 운동」, 『시설사회』, 장애여성공감 엮음, 와온, 2020, p.36.
- (39) 김순남, 앞의 책, p.38.
- (40) 립 윌러스 지음, 구정은 / 이지선 옮김, 『팬데믹의 현재적 기원 - 거대 농축산업과 바이러스성 전염병의 지정학』, 너머북스, 2020, pp.24~25.
- (41) 립 윌러스, 앞의 책, p.47.
- (42) 립 윌러스 지음, 구정은 / 이지선 옮김, 『팬데믹의 현재적 기원 - 거대 농축산업과 바이러스성 전염병의 지정학』, 너머북스, 2020, pp.24~25.
- (43) 립 윌러스, 앞의 책, p.39, p.43.
- (44) <https://aldf.org/issue/ag-gag/>
- (45) 윌·porter는 「綠は新しい赤 (Green is the New Red)」でこうした法案が反対意見を沈黙させ、消費者関連産業とその慣行に対する情報を遮断するための、露骨に企業の理解を優位に置いた法だと述べている。州議会に法案を提出した政治家は農業分野と密接な利害関係があり、多数の法案が産業内の利益集団から支持されている。Will Potter, *Green is the New Red*, City Lights Publishers, 2011. <https://www.youtube.com/watch?v=TPh8FnqtJuY> (最終検索日: 2021年2月5日)
- (46) 綠色革命は米、小麦、トウモロコシなど3大作物の多収穫品種、化学肥料と農薬、そしてこれらを結合する管理技術を構成要素とする一連の技術体系の開発と普及を意味する。1940年代初め、ロックフェラー財団とメキシコ農林省の推進で始まった。
- (47) 윤병선, 「그 소는 뭘 먹고 자랐을까?」 『인문잡지 한판 4- 동물』 민음사, 2020, pp.95~96.
- (48) 윤병선, 앞의 책, pp.99~101.
- (49) 윤병선, 앞의 책, p.98.
- (50) The Right of animals to be free from exploitation, cruelty, neglect, and abuse.
The Right of laboratory animals not to be used in cruel or unnecessary experiments.
The Right of farm animals to an environment that satisfies their basic physical and psychological needs.
The Right of companion animals to a healthy diet, protective shelter, and adequate medical care.
The Right of wildlife to a natural habitat, ecologically sufficient to a normal existence and self-sustaining species population.
The Right of animals to have their interests represented in court and safeguarded by the law of the land.